

三医看同窓会報

発行 三医看同窓会編集部 津市江戸橋2丁目 デザイン 株式会社 サラト <https://salat.co.jp>



びあつちゅう



同窓会会長
森 多佳美

日頃は三医看同窓会の運営につきまして、会員の皆様から多大なるご協力とご支援をいただいておりますことに、心からお礼申し上げます。

この度、前会長の栗本真弓様より引き継ぎ、同窓会会長に選任されました国立10回生の森多佳美です。同窓会の発展のために、他の役員と協力をしながら全力をあげて取り組んでまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

私たちの出身校は、昭和23年三重県立医学専門学校附属医院甲種看護婦養成所として始まり、三重県立大学医学部附属高等看護学校、三重大学医学部附属看護学校、三重大学医療技術短期大学、そして現在の三重大学医学部看護学科という変遷を経ています。4年制の大学教育となつてから25年が経過いたしました。現在の教育体制の卒業生が会員数約3,600人のうち1,800人余りとなり会員数の約5割を占めるようになってきました。そのような同窓生の皆様、看護師・助産師・保健師として、保健・医療・福祉及び教育の分野で人々と関わり、様々な健康を守る活動に活躍されています。特に2020年から2023年に5類感染症に移行するまでの間、新型コロナウイルスの感染拡大による未曾有の事態を経験し、保健所における保健師の皆様の活動をはじめとして、医療施設における患者対応、介護施設等における対応、軽症者の宿泊施設での活動、ワクチン接

種、教育現場の皆様の対応など、多岐にわたる皆様のご活躍には敬意を示し、同時にこの経験でのご苦労は筆舌に尽くしがたいことであつたと感じております。コロナ禍の経験を振り返ると、この同窓会の皆様とのつながりは大きく、活動の場は違えども皆様との確かなネットワークが大きな支えとなったことを宝物のように感じております。同時に看護の持つ底力を実感し、誇りを持てる職業の一員であることをともうれしく思います。感謝するばかりです。

最近では急速に人工知能(AI)の開発が進み、看護の領域にどのように取り入れていくのかを検討する機会が増えています。また、働く年代の人口が減少していくこととともに、使命感や個々の頑張りで働くのではなく、より良い働き方を皆ができることが求められています。今の時代を踏まえ少し前を見た看護職の在り方を、ぜひ様々な年代、多様な活動の場で活躍している会員の皆様と連携を図り、共に良い方向を見いだせていければと思います。

さて、今回の会報では例年に倣い、様々に活躍している会員の方のご活躍をご紹介しますよう準備してまいりました。公私ともにお忙しい中、快く執筆をお引き受けいただいた皆様に感謝申し上げます。

2024年を迎え、より良き年でありまう、願っておりますとともに、会員の皆様のご健勝とご多幸を心からご祈念申し上げます。

2022年～2024年度 三医看同窓会役員名簿

会長	森 多佳美	国立10回生	会計	濱口映美子	医短8回生
副会長	倉田 妙子	国立10回生	〃	渡部小央里	医短8回生
書記	船尾 浩貴	学部12回生	会計監査	潮田 美規	医短7回生
書記補佐	大北 真弓	医短7回生	〃	松田未来子	医短7回生

三医看同窓会のホームページを2011年より開設しております。総会、同窓会会報の発行のお知らせ等をさせていただきます。不定期の更新ですが、ご覧ください。また、住所変更もできますのでご利用ください。

【公式ホームページ】

<http://www.dosokai.ne.jp/sanikandosokai/>

医療安全管理部の活動を通して感じること

医療安全管理部 達村 真理子



1998年4月に看護師として三重大学病院で働き始め、気が付けば20数年が過ぎました。振り返ると、働き始めは仕事を頑張つて早く覚えなくてはとい

う気持ちで、いろいろな体当たりで経験しましたが、その分、沢山の失敗も経験してきました。ですが、多くの患者さんや先輩・同期・後輩に助けてもらい育ててもらい、なんとか今までやってこれたと感じています。沢山の失敗の中には大きな失敗もありました。今からは想像しにくいかも知れませんが、働き始めた当時は、カルテは「電子」ではなく「紙」、照合機器もなく、ダブルチェックも決まっておらず、経腸栄養用シリンジと注射用シリンジが同じ形、という状況で、それが当たり前でした。今になって思うと危険が潜んでいた状況も多々あったなあと感じます。

そこら現在に至るまで、電子カルテ・照合機器も誕生し、ダブルチェックも行うようになり、経腸栄養用シリンジもチップ型に変わり、以前に比べると間違えようにも間違えられないように工夫されることも増え、部分的に安全な環境が増えたと感じました。そんな中、2020年12月に医療安全管理部に異動することとなりました。看護師GRMとして、看護学校やラダー研修などで「医療安全」についての講義の中で、医療安全の今までの成り立ちを話す機会があります。2000年前後の大きな医療事故を機に、国全体が医療安全管理体制の整備をし始め、「個人」が気をつける風土から「組織全体」で取り組む体制に変化していきませんが、自分が働き始めた時期の少しあ

りました。そして、製品改善や機器導入、医療安全に関する職員研修の実施、マニュアル改訂など、目に見える形での変化につながっていると感じました。しかし、製品や機器が進歩し、少しずつ安全な環境に変わっていったことを実感する反面、治療方法の複雑化・高度化、そして疾患の多様性、求められる記録の細かさなど、今までは違った複雑な環境が加わり、そこにヒューマンエラー（コミュニケーション不足、思い込み、勘違いなど）も変わらず存在するため、インシデントが発生している現状も目の当たりにしました。

誰もインシデントを起こそうとして起こしている人はいませんが、どんなに気を付けていても人が人である以上、専門的な知識や技術の高さ（テクニカルスキル）とは、違う部分のコミュニケーションなど（ノンテクニカルスキル）が原因で、インシデントが発生することも痛感しています。インシデントの60%はノンテクニカルスキルが原因で発生していると言われている程です。組織全体での取り組みが重要と言えども、その組織は一人一人のスタッフの行動で形作られていくものであること、高度で複雑な治療も必ず人の手が入ることを考えると、やはり一人一人のスタッフが患者さんの安全、お互いのスタッフの安全を意識して行動することが大事だと感じています。



大学における医学・看護学教育

松田 未来子



医療現場では社会の少子高齢化や医療情勢の変化に対する対応が求められ、地域医療構想の実現や地域包括ケアシステムの推進に向け、他職種が連携して保健・医療・福祉を提供することが期待されています。その期待に対応するために三重大看護学科においても指定期限の改正を受けた新カリキュラムが2022年度から開始されました。その新カリキュラムで新たに始まった医学区・看護学科合同で行う「地域基盤型保健医療教育実習」について紹介します。

私が現在所属する医学部医学・看護学教育センターでは、医学部医学科1年生・2年生を対象に「地域基盤型保健医療教育実習」という実習が行われています。同実習を通じて地域ニーズを知り、地域にある医療資源、医療文化、健康と生活との関わりを理解することで地域保健医療福祉への貢献につ

いて考え実践する能力の修得を目指すというものです。具体的には、学生は三重県内29市町の小グループに分かれ、2年間通年で実習を行います。1年次では担当する市町村を訪問し住民の方々や地域の医療機関でインタビューを行ったり

地区踏査及び地域調査を行ったります。2年次では地域調査から見出した地区での課題に関する健康教室などの地域貢献活動を考え実施するというものです。これは、学生がグループ学習や実習を通して自ら課題を見つけ、その課題を解決する能力を身に付ける課題解決型学習(PBL:Project Based Learning)と呼ばれる学習方法であり、三重大学全学的にもすすめられている授業の一つです。

2022年の新カリキュラムでは、看護学科学生も同実習に参加し、医学科合同でグループを構成

し学科を超えたグループ活動を行うことで、職種が異なる学生同士のチーム活動力や課題解決に向けて協働する能力を養うことが期待されています。また、これまでの看護学科の臨地実習では、病気を持つ「患者」を対象とした病院での実習が中心に行われていたものが、このような地域で生活する住民という対象を理解することや、疾病を予防する保健活動での視点にも初学年から目を向けることが期待されます。

学生は、最初はお互い緊張し合っている様子もありますが、グループ間で話し合ったり、共に実習に参加したりするにつれ徐々にコミュニケーションを取りそれぞれの役割を果たす様子がみられていきます。また、地域の方々が訪問する学生を楽しみにお迎えくださることで、地域住民からの期待を直に感じ地域医療への貢献意識も高められたという学生の肯定的意見も聞かれています。

私も指導教員として担当する志摩市や大紀町、菟野町などに帯同し、学生と一緒に地域の歴史や医療について学ぶことで、自分の出身地である三重県津市の特色や魅力について改めて知り、学生以上に楽しんで実習をさせていただいています。また、地域の保健師さんにもご協力をいただき、その活動を知ること、病院と地域との連携や保健・福祉事業の重要性についても改めて実感する日々です。

難病支援に携わって

学部4期生 松田 尚子



私が三重大学病院の総合サポートセンターにて、難病看護を専任とする看護師として勤務して今年で8年目になります。それまでは全く異なる分野で働いておりましたが、ご縁があつて難病看護に携

一名体制での対応であるため、現在は脳神経内科領域の、いわゆる神経難病の支援をメインとしています。

病と申しましたが、実に多くの診療科に難病は存在しています。私

神経難病は完治が難しく慢性の経過をたどり、その症状も実に多種多様です。進行や症状の出現の仕方には個人差も非常に大きいです。進行性のものもあり、診断か

ら数カ月や数年で生涯を終えることもあります。

患者家族には、闘病の過程の中で身体的、精神的、社会的、経済的、いろいろなことがあります。それらを入院中や外来診察の場にて面談、あるいは電話などで支援しています。

私の難病患者とその家族との関わりは、ときに診断前からのこともありますが、多くは病名告知場面の同席から始まります。診断告知時の精神的ケア、疾患受容の支援、日常生活や症状に対するケア、生命予後に関わる胃ろうや気管切開・人工呼吸器装着を希望するか否かという意思決定の支援、メン

タルケア、入院調整、社会資源の活用など、支援の内容も様々です。

時には、これまで神経難病患者を担当したことがないという支援者もおおられ、その場合は支援者の方を支援するという役割も担います。

難病看護は在宅支援者の方々など、多職種連携も大いに必要です。自分ひとりでは、決して患者家族を支えられません。他の支援者の方々と連携協働できるように心がけています。

難病看護はテキスト自体も非常

に少なく、着任当初はどう看護していいのかわからないのか、手探りの状態でした。神経難病がどう進行していくのかなど、実際に患者さんやご家族と接する中で、一例二例が、大きな学びとなり、次の患者さんの看護に活かすことができていないかと思っています。

現在は、三重県から大病院に委託を受けて、「三重県の難病相談窓口」も担当し、三重県の難病支援に関わっています。

院内と院外合わせて、年間約

2,000件の難病相談に対応していますが、勉強させてもらう日々です。

難病看護は看護の基本が詰まっていますと聞いたことがあります。本当にその通りだなと感じています。大変なことももちろんありますが、やりがいも大きいです。患者家族に今後も寄り添いながら、看護にあたっていきたいと思えます。

地元津市で訪問看護師として

働く近況



塩崎 由佳

2012年3月に看護学科を卒業し、同年4月に三重大医学部附属病院に就職しました。最初の配属先は心臓血管外科・呼吸器内科外科でした。働く中で特にターミナル期にある患者様とずっと深く関わりたい、学びたいと思い、看護師5年目に退職。愛知県にある名古屋徳洲会総合病院に転職しました。こちらの病院の緩和ケア病棟で勤務し、患者様

ご家族様に関わり、お看取りや退院支援を行ううちに、在宅看護に興味をもちました。緩和ケア病棟で経験を積んだあと、看護師11年目である2022年、地元の津市へ戻り「くうねる訪問看護ステーション」

「シヨン」を共に立ち上げ、現在は津市で訪問看護師として働いています。

看護師を目指すきっかけとなったのは、母・母方の祖母が看護師だった事もあり、物心ついた時から「自分は看護師になる」と漠然と思っていました。また、高校の時の1日看護体験で関わった患者様のおばあちゃんに「ありがとな、元気出たわ。」と言ってもらった言葉がとても嬉しく、看護師という職業の力はすごいと感じ、そこから更に看護師を目指したいという気持ちが強くなりました。また、看護師1年目の5月に母方の祖母が亡くなったのですが、祖

母が入院中、亡くなる前に「うちの孫は3代目の看護師なんさ。」と看護師さんに嬉しそうに話していたと聞き、『大好きなおばあちゃんから自慢出来るような素敵な看護師になるう』と思ったのを覚えています。

急性期病棟で働いていた頃、忙しさのあまりに患者様の話をろくに聞けなかった事、整容などを後回しにしてしまった事が心残りでした。緩和ケア病棟では、病棟の性質上、入棟してから亡くなるまでの期間がとても短い方もいました。その人の想いや背景、家族関係などもあまり知れないまま、関係性もすっかり出来ないままのお看取りで、「もつとしてあげられた事があったかも」と悩む事もありました。

在宅では利用者様やご家族様の想いを常に尊重しながらケアを行う必要があります。また24時間医療者がみている訳ではないので、訪問している時間以外にどのような過ごし方、本人やご家族様が過ごしやすい方法は何かを考える必要があります。こういった点からも、急性期病棟や緩和ケア病棟の時にもどかしい想いをしていた、『対象者として向き合う』関

係性をゆっくり作っていく』が、今は自然と出来ているような気がします。

訪問看護をはじめた当初は、1人で訪問先にいくのも不安でしたが、わからない事や困った事は他のスタッフに相談すればいい、利用者様本人やご家族様と共に一緒に悩み考えればいい、と分かり、今では少し心にゆとりをもつて働けていると思います。

三重県生まれ三重県育ちの私にとって、地元津市の地域医療に貢献出来ている事は嬉しく、これからも津市で在宅療養を考えている、在宅療養で悩んでいる方々の力に少しでもなれたらいいな、と思っています。

編集委員

医短11期生 津田 翔司
医短11期生 佐藤 史絵

